

Kurume Castle Sotoguruwa Site

- Report of 19th Survey -

久留米城外郭遺跡 | 第十九次発掘調査報告 |



延寶八年久留米市街圖（『延寶八年國』1680年）



天保年間久留米城下図（『天保年間國』1830年～1844年頃）

平成25（2013）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査では、有馬氏の城普請に伴うとみられる鑄造遺構をはじめ、古代の整地層や竪穴建物、さらに旧石器など、本遺跡では初となる、いくつもの新発見がありました。この調査の成果が、今後の久留米市の発展と活性化に貢献することを願ってやみません。

最後に、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました■■■■氏をはじめ、周辺住民の皆様に心より御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成 24 年度に■■■■氏の委託を受けて実施した、久留米城外郭遺跡第 19 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江島伸彦と西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、江島と西、鐘江 清、椋島ミドリ、御手洗久直が行い、浄書は江島と西、当課の江頭俊介が行った。遺物実測図は、旧石器を江島が、その他を西が作成し、西が浄書した。
4. 遺構写真は、マミヤ R B 67 を用いて西が撮影した。遺物写真はトヨビュー 45 G II を用いて、当課の塚本映子が撮影した。なお、本文と実測図、観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成した。図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、S D－溝、S E－井戸、S I－竪穴建物、S K－土坑、S P－ピット、S T－土壌墓、S X－埋嚢を示す。
7. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号は L N G－019、調査番号は 201216 である。
9. 本書の執筆・編集は西が行った。
10. 表紙図版の赤丸「○」は、いずれも本調査区を示す。

目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成24年5月9日、地権者の■■■■氏から、久留米市城南町10-2、10-3、10-54における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城外郭遺跡の範囲内で、今回も江戸時代の屋敷に伴う遺構が残存していると予想された。さらに、試掘調査で古代の包含層を確認したため、同年5月14日に発掘調査が必要である旨を回答した。7月2日、地権者より発掘調査の依頼が提出され、7月11日に久留米城外郭遺跡第19次調査の委託契約を締結した。発掘調査は7月17日より開始し、8月20日に終了。その後、平成25年3月31日までに、遺物整理と報告書作成を行った。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長：堤 正則	
調査総括：市民文化部	部 長：辻 文孝	次 長：佐藤 光義
文化財保護課	課 長：古賀 正美	
	課長補佐兼課主査：宮崎 俊一	課長補佐：園井 正隆
	課 主 査：白木 守 辻 義則	
	庶務担当：豊福 早苗	
	調査担当：江島 伸彦 西 拓巳	
	整理担当：古賀 和子 中里由佳絵	

発掘調査臨時職員

石橋 康子、大坪 進、鐘江 清、桃島 ミドリ、末安 茂喜、杉山 光恵、仲尾 信
溝上 国男、御手洗 久直、山下 洋子（五十音順）

発掘調査整理臨時職員

五反田 真美

3. 調査の目的と経過

本調査は、江戸時代の上級武家屋敷と、下層の古代整地層を把握することを目的とした調査である。平成24年7月17日、重機による表土剥ぎを開始。地表下約1mで、整地層直上の近世遺構面（上層）を検出し、各遺構の調査・記録を実施した。8月3日、整地層を重機で除去し、地表下1.4mで地山上の遺構面（下層）を検出。8月9日まで各遺構の調査・記録を行い、8月10日に、高所作業車で調査区全体の写真を撮影。8月17日に埋め戻しを行い、8月20日に撤収して、発掘調査を完了した。

調査区内の測量は、トータル・ステーションを用い、測量データは「遺構くんCUBIC」で編集・保存した。ただし、土層と一部の個別遺構は、手測りで実測した。記録写真は、モノクロ・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

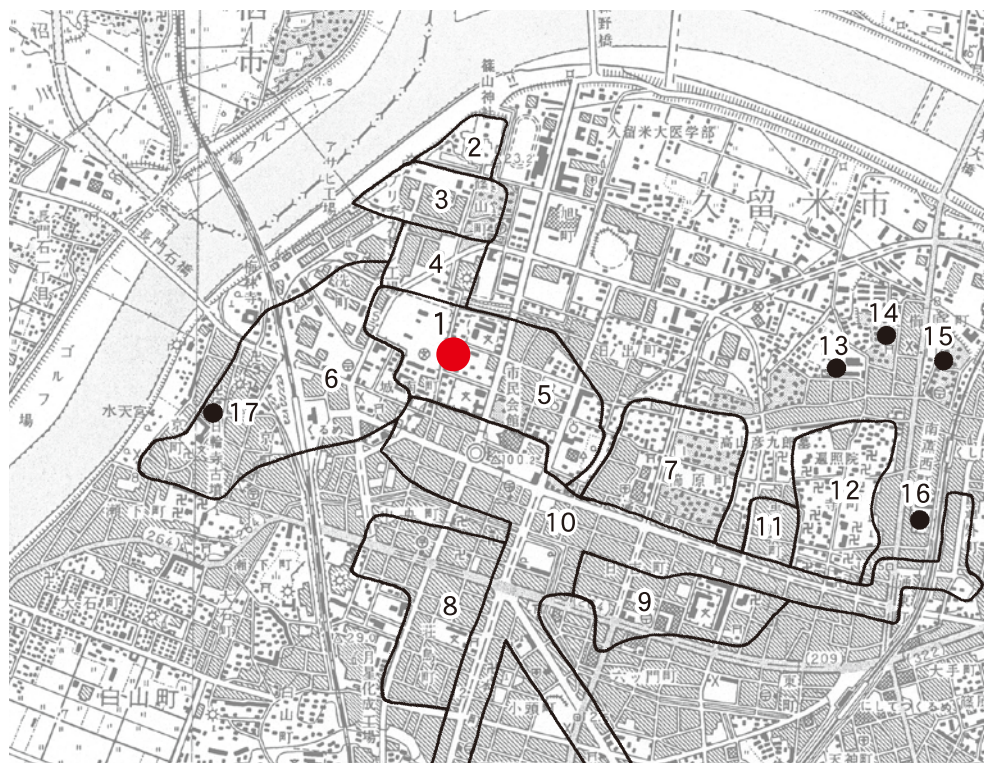
Ⅱ．位置と環境

久留米市は、九州一の大河である筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。古代においては筑後国の国府や国分寺が置かれ、筑後国の中心を占めた。近世には、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は日本の軽工業を担う工業都市として発展し、九州新幹線が全線開通した今日もなお、人口 30 万人を擁する北部九州の中核都市として、更なる飛躍を図っている。

筑後川は宝満川と合流して南西へと曲がるが、その左岸には、筒川や高良川に面して半島状の洪積台地がいくつも形成され、今日の市街地もこの上にある。久留米城外郭遺跡は、篠山神社から南へ緩やかに傾斜する低台地に広がり、本調査区は、その標高約 10.7 m 地点に位置する。

この台地上では、弥生時代から活発な人の動きがみられる。久留米城外郭遺跡では、中期の甕や器台などの日常土器が出土することがあり、久留米城本丸付近に集落があったと考えられる。周辺では、東櫛原今寺遺跡で弥生時代前期から中期の建穴建物がみられる。一方で、京隈侍屋敷遺跡や櫛原侍屋敷遺跡、東櫛原今寺遺跡、石丸遺跡、辻遺跡で、弥生時代中期後半の甕棺墓群が営まれる。

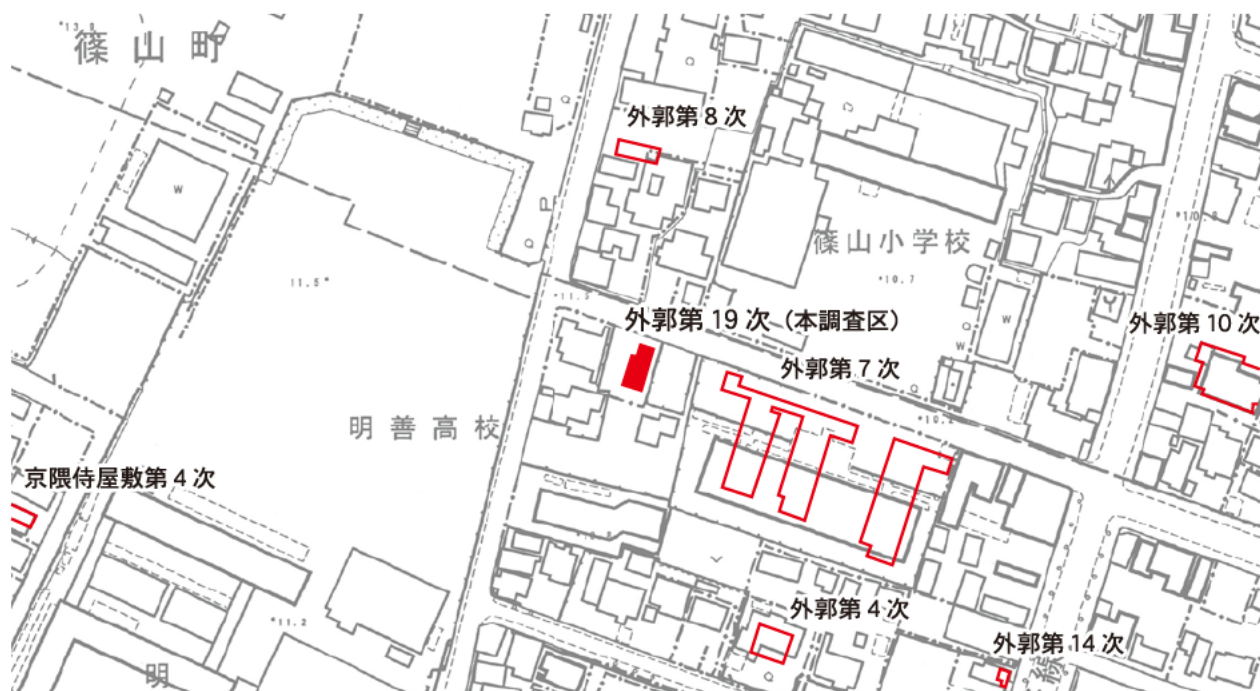
古墳時代には、5 世紀末から 6 世紀初頭の前方後円墳である日輪寺古墳が、低台地の最西端に造営される。この古墳の経営基盤は不詳だが、古墳周辺がこの地域の中心地であったのだろう。承平年間（931～938）に成立した『和名類聚抄』には、筑後国御井郡八郷の一つに節原郷の名が見え、歴史地理学的研究から、筒川左岸の低台地中央部に位置したと推測される。南薫西遺跡第 6 次調査では、その節原郷の中心集落と考えられる掘立柱建物群が検出された。工房的性格の竪穴建物や、「大神」「大領」と書かれた墨書・刻書土器が出土したことも、この集落の拠点的性格を示す。だが、台地上の古代の遺構・遺物は総じて少なく、台地上における集落の展開は不明瞭である。



凡 例

1. 本調査区 (第19次調査)
2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城二ノ丸跡
4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭遺跡
6. 京隈侍屋敷遺跡
7. 櫛原侍屋敷遺跡
8. 庄島侍屋敷遺跡
9. 十間屋敷遺跡
10. 久留米城下町遺跡
11. 鉄砲屋敷遺跡
12. 寺町
13. 東櫛原今寺遺跡
14. 石丸遺跡
15. 辻遺跡
16. 南薫西遺跡
17. 日輪寺古墳

第1図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第2図 久留米城外郭遺跡第19次調査区位置図(1/2,500)

中世においては、在国司や院、有力武士、さらに寺社を巻き込んだ領地をめぐる駆け引きと、干戈交える戦乱の舞台になった。文献上での久留米城の初出は、天正11年(1583)に高良山座主の弟麟圭が、久留米城に籠ったという記述である。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定で小早川秀包に久留米城が与えられたが、関ヶ原の戦い後、筑後国は田中吉政の所領となった。柳川城を本城とした吉政も、支城である久留米城の整備に着手したと思われるが、これら毛利から田中にかけての遺構は、後世の城普請によりほぼ消滅しており、主な遺構として、城下町遺跡第2次調査で毛利時代の教会や、田中時代の堀が検出されたのみである。元和6年(1620)、田中氏の改易により有馬豊氏が入国し、本城とした久留米城の改修と、現在も残る城下町の建設が始まった。これにより、本丸・二ノ丸・三ノ丸・外郭が連なる連郭式の城郭が築かれ、それを囲むように、京隈・櫛原などの侍屋敷と城下町が整備された。

本調査区は、『延寶八年図』では宇高氏の、『天保年間絵図』では渡瀬氏の屋敷地である(表紙図版参照)。宇高氏の屋敷は、『天保年間絵図』では櫛原侍屋敷に移動しており、『安政二年改切絵図』(1855)では椎太夫が300石を与えられているが、『安政年間図』(1854～1859)では権大夫と記されており、「椎太夫」は誤記と思われる。権大夫は、柔術良移心当流の師範であった下坂與三太夫の高弟としても、後世に名を残している。

渡瀬氏は、福島正則縁故の福島丹波の婿であった、福島佐衛門太夫にルーツがある。佐衛門太夫は、渡瀬平太夫将監に改名した後、豊氏の久留米入封の際に召抱えられた。『寛文分限帳』では将監が御馬廻五番組頭1000石を、『寛永御家中分限帳』では弟の又兵衛が御馬廻老番の300石を与えられた。島原の乱には、将監をはじめ、又兵衛と将監の息子平太夫・平八が参戦。正月元旦総攻撃では、左九組頭の将監が負傷し、後に久留米で死去した。渡瀬氏は代々上級武士として仕え、平太夫は『弘化三年手鑑』では番頭六組を任せられ、『安政二年改切絵図』では700石を与えられている。

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序 (第3図)

本調査区は、地表下約20～50cmにバラスや真砂土が敷かれ、その下に、炭・焼土が混じる暗褐色土が約60cm堆積する。この暗褐色土直下の、整地層に掘りこまれた標高約10～10.2mに、近世の遺構面(上層)がみられた。なお、遺構面上には暗褐色～黄褐色の、炭粒や焼土を含む粘質土が薄く堆積する箇所がある。そして、標高約9.5～10.2mにかけての地山上層に、黒褐色の整地層が堆積する。古代の遺構面(下層)は、地山面にみられた。なお、地山は黄褐色を呈する。

2. 検出遺構 (第4、16・19図)

今回の調査では近世の溝状遺構3条、井戸1基、土坑10基、古代の整地層1箇所、竪穴建物2棟、土壇墓1基、その他のピット多数を検出した。以下、主な遺構について説明する。

上層の遺構

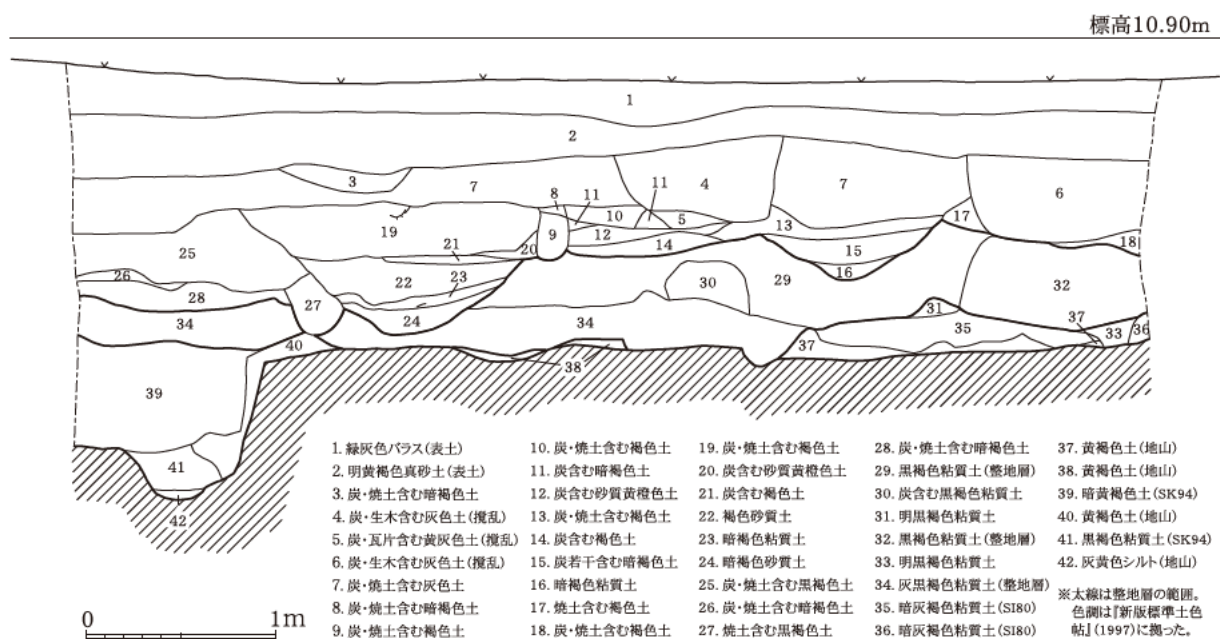
溝状遺構

SD 30 (第4、11図)

調査区西部から南西側で検出した、いずれも調査区外に延びる遺構である。東西に延びる幅約1.2m以上の溝と、そこから北北東方向に延びる二条の細い溝からなる。東側の細い溝は、幅約60cmで、西に曲がることから、二条の細い溝で長方形の区画を形成すると思われる。深さはいずれも約20cmである。主な出土遺物に、染付片をはじめとする陶磁器や瓦質土器、土師器皿、砥石がある。また埴塼や鉄滓、焼成粘土塊、鉄釘も、特に南西隅と北側から集中して出土した。遺物の年代は、16世紀後半から17世紀前半が主である。

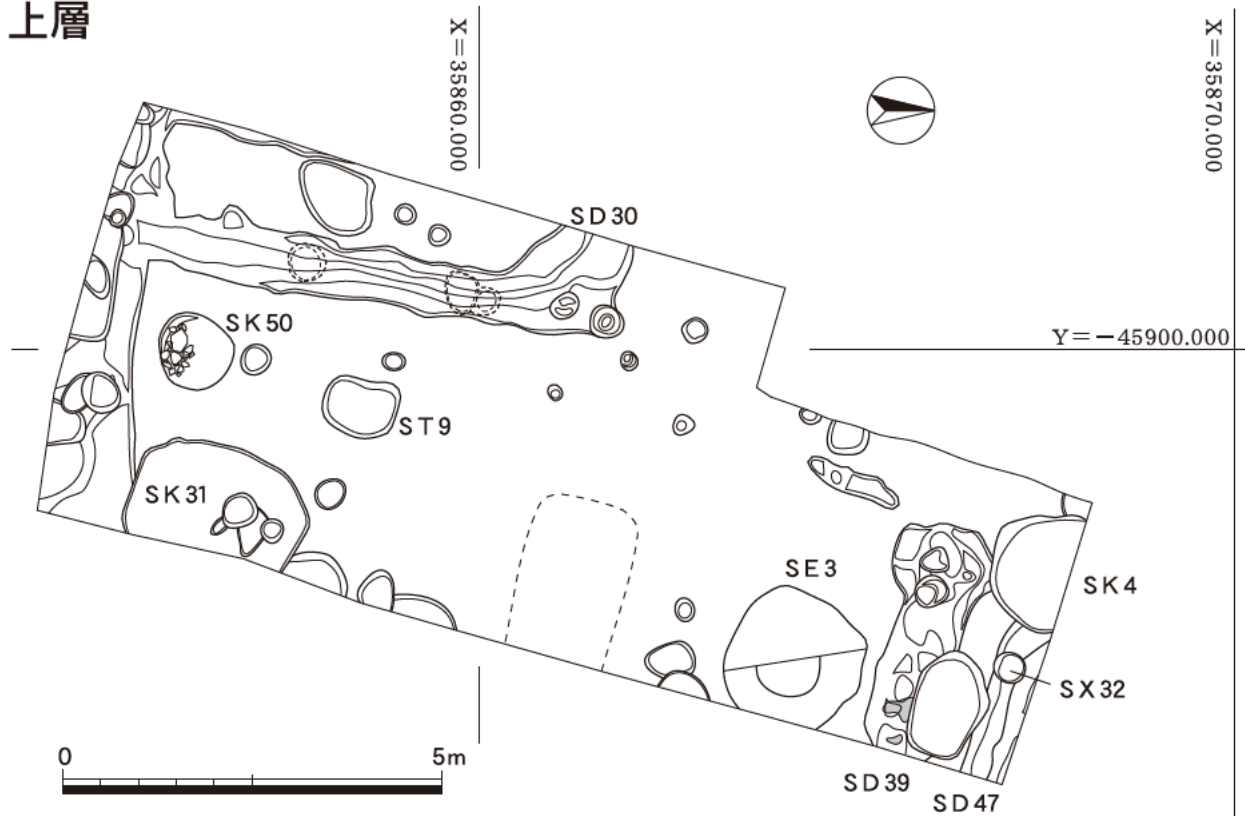
SD 39 (第4、12図)

調査区北東側で検出した、西端が円形状になる溝である。東端は調査区外に延びるが、長さ約3.1



第3図 調査区南壁土層実測図(1/40)

上層



※トーンの範囲は焼土を示す。

下層



第4図 久留米城外郭遺跡第19次調査遺構配置図(1/100)

m、幅約 90 cm で、深さは約 50 cm である。埋土は、炭粒と礫を多く含む灰色の砂質土で、焼土層を挟む。主な出土遺物には、陶器の大皿や染付碗、土師器皿などがあり、これらの年代は 17 世紀前半に集中する。また、埴塙や焼成粘土塊、鉄滓も共伴し、漆器も 2 個出土した。

S D 47 (第 4、12 図)

調査区北東端で検出した溝で、S K 4、S X 32 などに切られ、S D 39 にほぼ並走する。複数の土坑に切られている上、一辺以外の遺構の大半が調査区外に及ぶため、長さ約 2.1m、深さ約 20 cm までしか検出していない。埋土は黄褐色の砂質土である。白磁小碗や瓦質土器、陶器碗などが出土し、その年代は 17 世紀前半に収まる。

井戸

S E 3 (第 4、13 図)

調査区北東側で検出した円形の井戸である。安全上、深さ約 80 cm まで掘削した。掘方は直径約 1.5 m で、一部は調査区外に及ぶ。上層に黄褐色ブロック混じる暗褐色粘質土が、下層に褐色粘質土が堆積し、上層には玉砂利を含む。出土遺物は、土師器皿や鉄釘、多数の瓦に加え、染付を中心とした陶磁器が大半であり、17 世紀後半から 18 世紀の遺物が中心である。井戸枠は直径約 80 cm で、砂利を含む暗灰色粘質土が堆積する。熨斗瓦が大量に出土したため、井戸枠も瓦製だった可能性がある。出土遺物は、肥前系陶器甕など 17 世紀後半のものもあるが、18 世紀から 19 世紀前半の陶磁器が大半を占め、土師器皿や寛永通寶などを含む。

土坑

S K 4 (第 4、12 図)

調査区北側で検出した、直径約 1.6 m、深さ約 50 cm の円形土坑である。湧き水が著しく、井戸の可能性もあったが、掘り方と井戸枠の違いが判然とせず、床面で地山を検出したので、廃棄土坑と判断した。出土遺物は、近世の陶磁器や土器が大半である。また、礫や一部変色した瓦が大量に出土した。遺物の年代は 17 世紀から 19 世紀と幅広いが、17 世紀後半から 18 世紀が主である。

S K 31 (第 4 図)

調査区南東部で検出した浅い円形の土坑である。東側は調査区外に延びるが、直径約 2.4 m、深さ約 20 cm である。S D 30 をはじめ、周辺の遺構を切る。出土遺物として、古代の土師器・須恵器が多く混入していたが、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけての瓦器、焙烙もあり、遺構の年代も同様だろう。この他、鉄釘や焼成粘土塊、漆器が出土した。

土壙墓

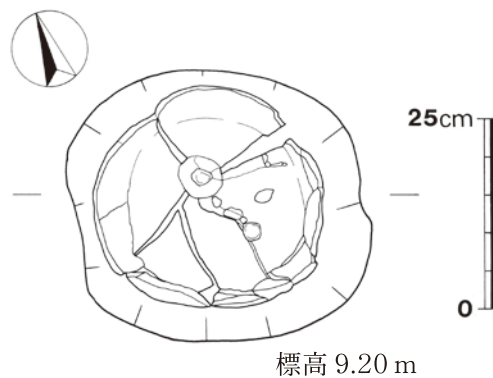
S T 9 (第 4・7、14 図)

調査区南側で検出した不整円形の土坑である。土器の出土状況と、埋土が灰オリーブ色一層のみであることから、土壙墓と判断した。長さ 96 cm、幅 78 cm、深さ 20 cm で、暗灰褐色粘質土が堆積する。床面には、土師器坏身が伏せてあったほか、埋土からは弥生土器、8 世紀後半から 9 世紀初頭にかけての土師器・須恵器、土鍾が出土している。

埋甕

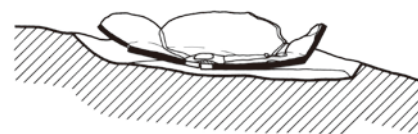
S X 32 (第4・5、15 図)

S D 47 を後出する形で検出した埋甕で、掘方は直径約 38 cm、深さは最大で 5 cm 残存する。甕は、底部付近のみが残存していた。便所甕として用いられており、内面には尿石が固着する。S D 47 の年代から、17 世紀後半以降と思われる。甕の詳細は、遺物観察表を参照されたい。



整地層

1 面の遺構は、黒褐色粘質土層に掘り込まれていた。この土層は、包含層や流れ込みの可能性もあったが、出土遺物がほとんど磨耗しておらず、また下層の 2 面の遺構は削平を受けている。これらから、この土層は版築を有さない、ゆるい整地層だと判断した。出土遺物は、近世陶磁器や埴塼、10 世紀代の黒色土器細片など、ごく一部の混入品を除けば、弥生土器と古代の土師器・須恵器のみで、その年代は弥生中期と、7 世紀



第 5 図 S X 32 実測図 (1/10)

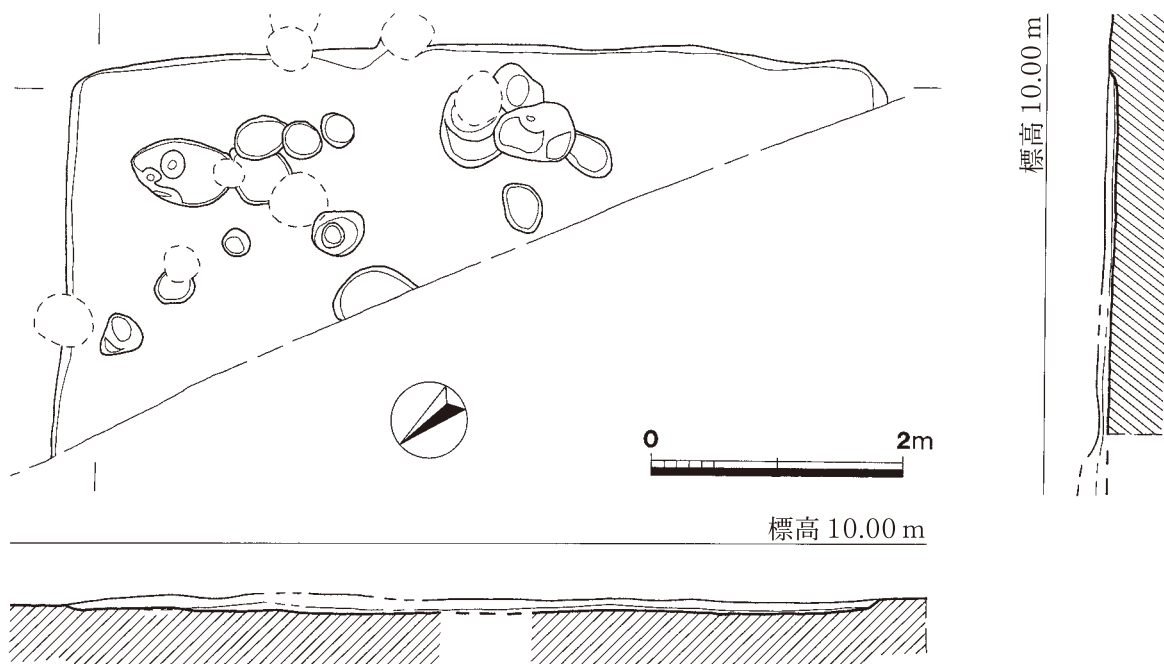
から 9 世紀前半に収まる。また、焼成粘土塊も整地層全体から出土した。

下層の遺構

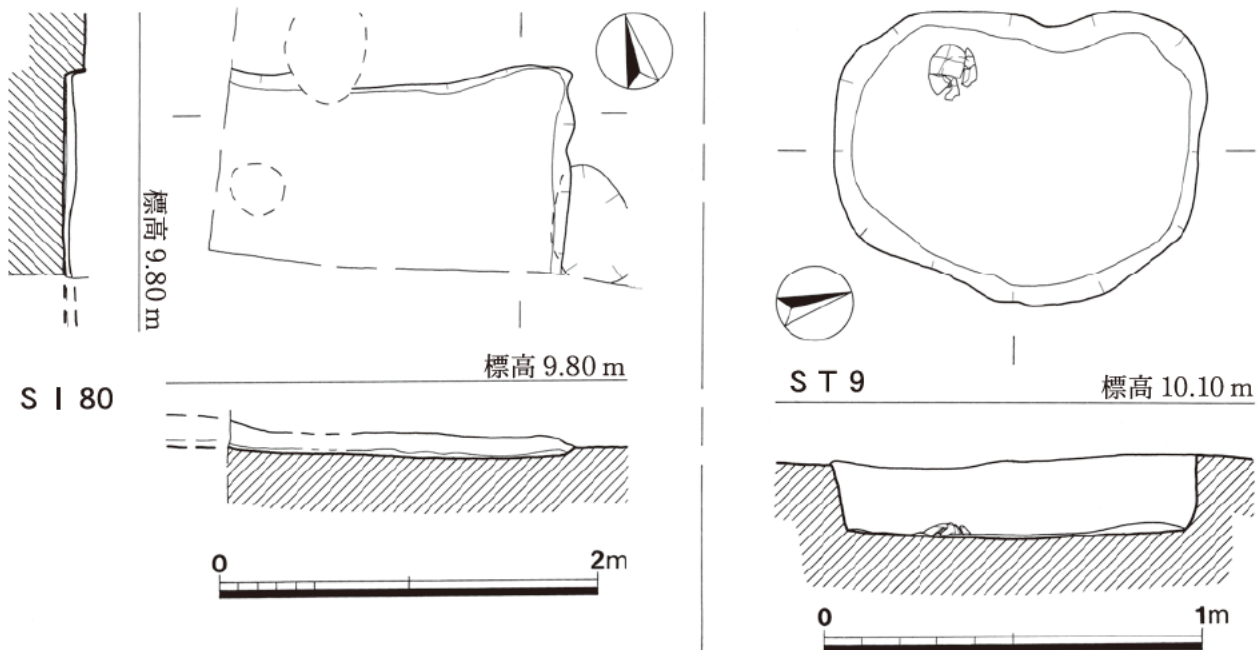
竪穴建物

S I 78 (第4・6、17 図)

調査区西側中央部で検出した、方形のプランを有する遺構である。一辺の長さ約 6.5 m、深さ約 10 cm を測る。調査区内にかかるのは一部で、カマドは南壁または西壁にあると推測される。出土遺



第 6 図 S I 78 実測図 (1/60)



第7図 S I 80、S T 9実測図（1/40、1/20）

物は、弥生土器が大半を占めるが、埋土や建物下のピットから古代の土師器やTK 209 並行の須恵器細片が出土している。また、ナイフ形石器と石包丁の破片も出土した。

S I 80（第4・7、18図）

調査区南西端で検出した。竪穴の一角しか検出しておらず、柱穴やカマドの位置は不明である。最大長約2.8m、深さは最深部で20cmに及ぶ。出土遺物は、わずかに土師質の土器細片が出土したのみだが、本遺構を切るピットSP 51からは8世紀後半の土師器坏身片が出土している。よって、遺構の年代はS I 78と同じ8世紀前半で妥当だと考えられる。

土坑

S K 91（第4図）

調査区南側で検出した楕円形の土坑で、近世の土坑SK 50とピットに切られる。残存長約60cm、最大幅60cm、深さ約30cmを測る。埋土は、上層に褐色粘質土が、下層に明褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、弥生土器が大半を占め、8世紀代の土師器が伴う。

S K 93（第4図）

調査区南東側で検出した楕円形の土坑で、東側は調査区外に延びる。径約1m、深さ約15cmの浅い土坑で、濃黒褐色土が堆積する。出土遺物は、弥生土器と6世紀から9世紀前半の土師器・須恵器が占めるが、年代は8世紀後半が主である。弥生土器の一部は丹塗りを施す。

S K 94（第4図）

調査区南東隅で検出した楕円形の土坑で、SK 93に先行する上に、遺構の大半が調査区外に及ぶ。残存長約2m、残存幅約1m、深さ約4.2mで、湧き水が著しく、底部は地山よりさらに下層の灰黄色シルト層に及ぶ。埋土はSK 93とほぼ同じだが、若干黄色味を帯びて明るい。出土遺物もSK 93と同様で、土師器・須恵器の年代も8世紀後半が主だが、9世紀代の土器は比較的少ない。

2. 出土遺物（8～10・20～40 図、第1・2表）

調査区全体で、パンコンテナ6箱分の遺物が出土した。大半が、弥生土器と古代の土師器・須恵器である。紙幅の都合上、個々の法量や色調などの詳細については遺物観察表を参照願ひ、ここでは特徴について述べる。

1、2は鹿文や呉須の色調から、明染付の可能性はある。ただし細片のため、初期伊万里の可能性も残る。38はへう記号を有する土師器坏蓋である。三叉状に直線を刻む。40の土師器坏身は、S T 9床面に伏せられた状態で副葬されていた。底部のへう切りが未調整なので、9世紀第2四半期の古相に比定できる。42は須恵器模倣坏で、本調査区の土師器で最も古いものである。43の臚や49の有蓋高坏は、本調査区でわずかに見られた7世紀代の須恵器である。50の砥石は、粒子の細かい砂岩を用いている。折損面も砥面に転用して、使用頻度が高い。52～54には、本調査区で出土した弥生土器の典型例を示した。いずれも刷毛目が残ри、53は二次被熱による磨耗が著しい。54は、頂部に黒斑を有する。57は、須恵器坏身でも古手のものである。他の遺構でも出土しているが、S K 93出土品が最も残りが良いので図示した。58は、底部に刻書を有する土師器片である。完存しないが、「木」「禾」「米」などの下部と思われる。60・61は、高台を有する土師器坏身だが、底部の最大厚が1.1cmにもなり、焼け歪みが生じ、器形も弛緩したタイプである。62の須恵器坏蓋は内面を硯に転用しており、色調の似た64の須恵器坏身とセットで用いたのだろう。66は、攪乱から出土した近世の灯明皿である。口縁部に煤が付着し、内面は内黒である。

本調査区では、溝状遺構をはじめ、1面のピットや遺構面などで、小型の埴塼が多数出土した。いずれも手づくねで作るが、胎土は比較的精良である。おおまかに、厚手の個体（6・10・11、44）と、薄手で尖底状になる個体（7～9、17、39）に分けられる。金属滓が付着するものが大半だが、金属滓が付着しない個体（11、17、44）もわずかにある。ただし、完形品が無く、全て破碎した状態で出土した。付着した金属滓は、鉛と思われる黒色を呈し、一部は緑青や鉄錆を吹く。

67は、本調査区周辺では初の出土となる旧石器である。ナイフ形石器で、刃部に細かい調整がみられる。68は石包丁の破片である。本調査区では大量の弥生土器が出土しているが、確実な弥生時代の石器はこれのみである。粘板岩製で、立岩系石包丁とは異なる、在地産のものである。

本調査区で出土した銭貨は、ほぼ全てが寛永通寶だが、1点だけ洪武通寶（71）が出土した。17世紀の土坑S K 50から出土したものである。S K 50では、洪武通寶のほかに中世の遺物は見られないことから、17世紀まで用いられていたものが埋没したのだろう。

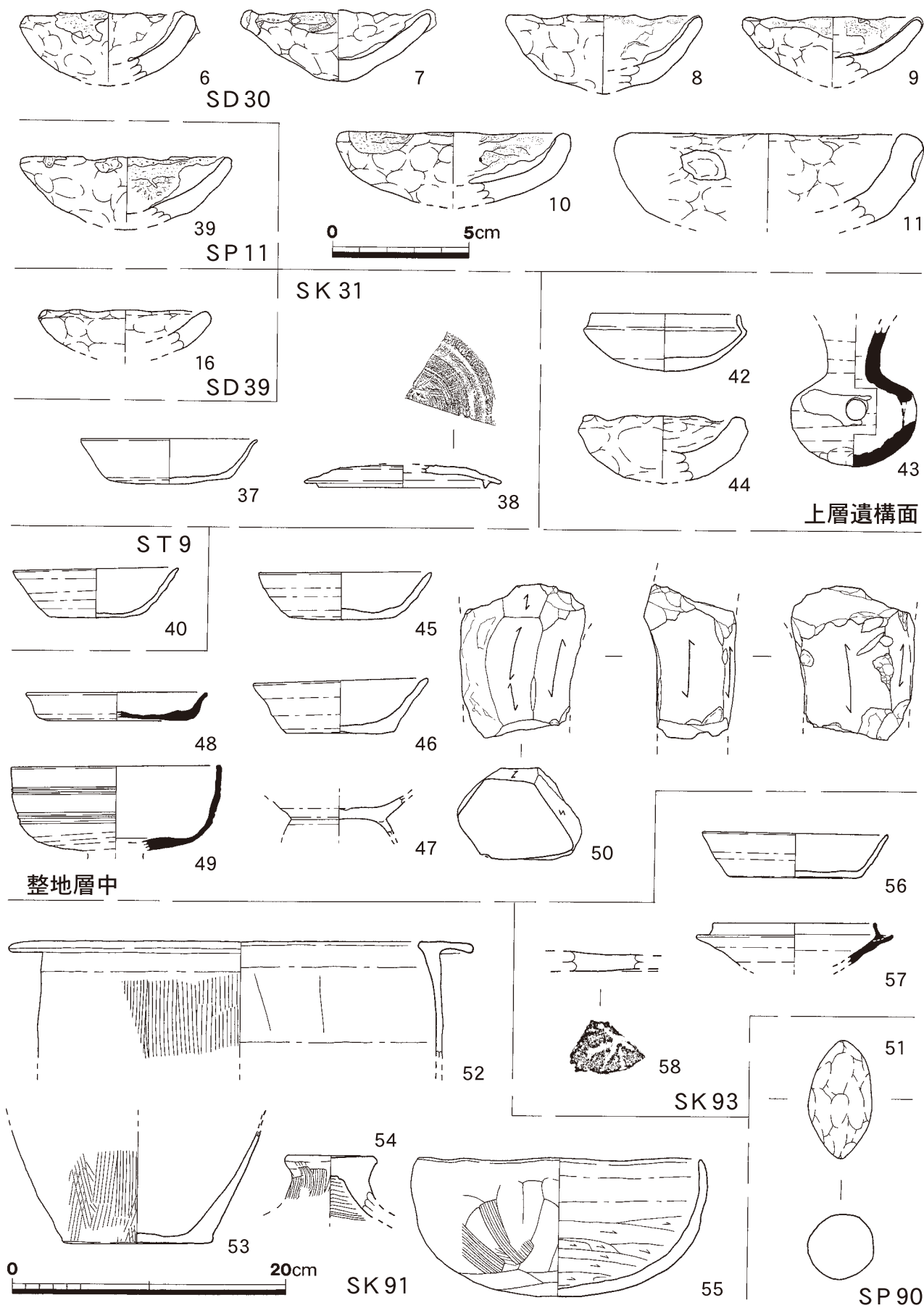
なお、遺物観察表の〔 〕は復元値を、（ ）は残存値を示す。個々の遺物の分類、年代は、主に以下の文献に依った（編著者五十音順）。

九州近世陶磁学会 編 2000 『九州陶磁の編年』

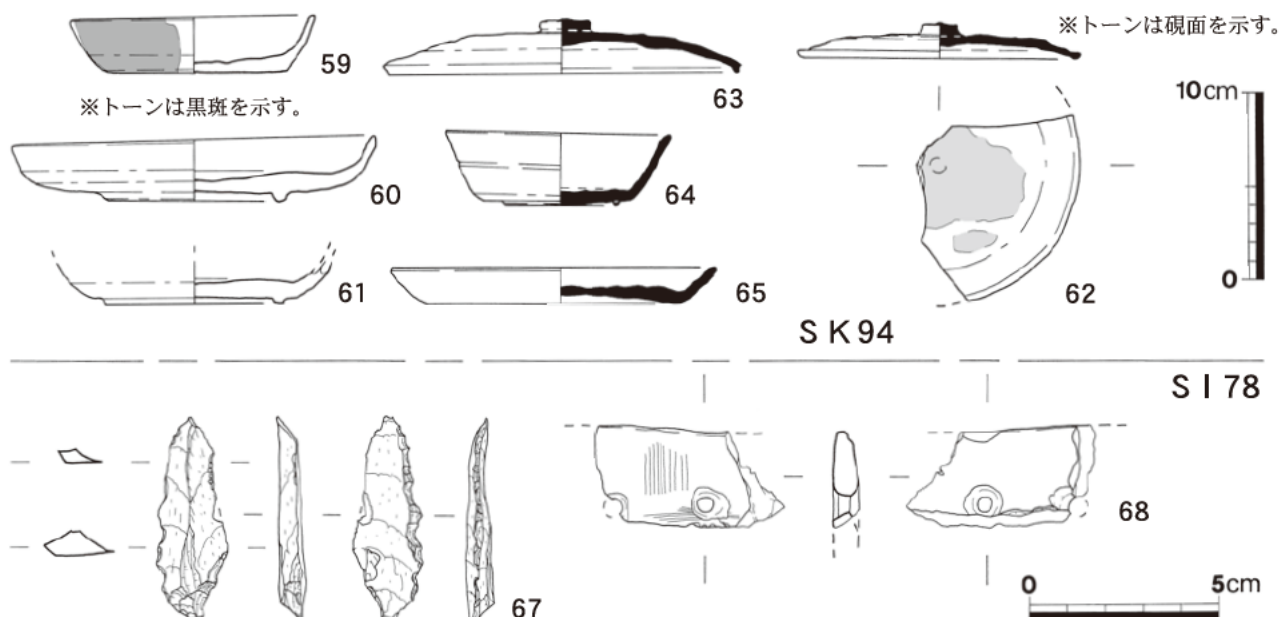
白木守 編 1994 『安武地区遺跡群Ⅷ』 久留米市文化財調査報告書第87集

松村一良 1983 「筑後国府の調査」 （財）古代学協会 『古代文化』 第35巻第7号

山本信夫 1988 「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」 『中近世土器の基礎研究』Ⅳ



第8図 出土遺物実測図1 (埴塙・投弾・刻書土器は1/2、その他は1/4)



第9図 出土遺物実測図2（石器は1/2、土器は1/4）

第1表 出土遺物観察表その1

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎土 (製作地)	備考	登録番号
				口径 (径)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
1	SD30	磁器	皿	-	-	(1.2)	染付		唐草?	草	-	明染付 or初期伊万里	17c2四半期	201216 000189
2	SD30	磁器	皿	-	-	(0.4)	染付		-	花・鹿	-	明染付 or初期伊万里	17c2四半期	201216 000190
3	SD30	陶器	碗	-	-	(4.2)	土灰釉		-	-	-	肥前	17c初頭	201216 000193
4	SD30	瓦質土器	火鉢	-	-	(9.1)	灰色		横ナデ	横ナデ	-	精良	16c末	201216 000196
5	SD30	瓦質土器	槽鉢	-	[6.7]	(4.9)	灰オリーブ色		ナデ・ 襷目	オサエ・ナデ	ナデ	精良	16c後	201216 000197
6	SD30 南西隅	土製品	埴埴	[5.8]	-	(2.6)	淡黄色	黄灰色	オサエ	オサエ	-	1mm以下の砂粒	緑青吹く	201216 000206
7	SD30 南西隅	土製品	埴埴	[6.4]	0.7	2.5	灰白色	-	オサエ	オサエ	オサエ	1mm以下の砂粒	緑青吹く	201216 000207
8	SD30 北側	土製品	埴埴	[6.9]	-	(2.8)	灰白色	褐灰色	オサエ	オサエ・ ナデ?	-	1mm程の砂粒		201216 000217
9	SD30 北側	土製品	埴埴	[6.2]	-	(2.2)	黄灰色	灰赤色	オサエ	オサエ	-	1mm以下の砂粒		201216 000218
10	SD30 北側	土製品	埴埴	[7.9]	-	(2.6)	灰色		オサエ	-	-	1mm程の砂粒	緑青吹く	201216 000214
11	SD30 北側	土製品	埴埴	[10.2]	-	(3.3)	黄灰色	褐灰色	オサエ	オサエ・ ナデ?	-	1mm以下の砂粒	金属滓付着しない	201216 000215
12	SD39	陶器	大皿	-	-	(4.2)	鉄釉		-	-	-	肥前	薄緑皿、17c後	201216 000268
13	SD39	陶器	皿	-	[3.2]	(1.5)	灰釉		-	-	砂目	肥前	17c前	201216 000267
14	SD39	土師器	皿	7.3	3.3	(2.1)	浅黄褐色		横ナデ	横ナデ	回転糸切り	精良	近世	201216 000263
15	SD39	土師器	皿	-	[6.6]	(2.1)	浅黄褐色		ナデ	横ナデ	回転糸切り	精良	近世	201216 000264
16	SD39	土製品	埴埴	[5.8]	-	(1.6)	灰白色	黄灰色	オサエ	オサエ・ナデ	-	精良	金属滓付着しない	201216 000273
17	SD47	陶器	碗	14.3	5.6	6.9	褐釉		-	-	砂目、兎巾	肥前	17c前	201216 000284
18	SD47	瓦質土器	手燗り 火入	-	[9.2]	(9.6)	暗灰色	灰色	ナデ	横ナデ	回転ハケ目	精良	脚付、側面に開口部	201216 000288
19	SE3 枠内	磁器	猪口	6.6	[4.3]	5.7	白磁		-	-	-	肥前	18c後	201216 000035
20	SE3 枠内	磁器	碗	11.0	4.2	5.7	染付		松竹梅	-	見込釉刺	肥前	くわらんか碗、18c前	201216 000032
21	SE3 枠内	土師器	皿	7.8	3.6	2.3	浅黄褐色		横ナデ	横ナデ	回転糸切り	精良	近世	201216 000030
22	SE3 枠内	陶器	壺	[35.2]	-	(9.8)	褐釉・灰釉	褐釉	-	オサエ・ナデ	-	肥前	17c後、便所壺に使用	201216 000031
23	SE3 掘方	磁器	猪口	6.9	[3.8]	5.1	白磁		-	-	-	肥前	18c	201216 000054
24	SE3 掘方	磁器	碗	8.5	3.3	5.1	染付		桐(コン ニヤク判)	-	-	肥前	18c中〜後、口縁歪む	201216 000051
25	SE3 掘方	磁器	大皿	[28.6]	-	(4.2)	染付		莫草	松風	-	肥前	17c末	201216 000050
26	SE3 掘方	磁器	碗	-	-	(2.2)	染付		陽刻	山水?	-	明染付	17c、型打成形	201216 000043
27	SE3 掘方	磁器	皿	-	-	(0.6)	染付		鹿	-	ハリ、角福文	肥前	18c末〜19c初	201216 000048
28	SE3 掘方	磁器	皿	[15.0]	[7.2]	(2.8)	染付		-	莫草	五弁花、見込釉刺	肥前	18c前	201216 000049
29	SK4	磁器	皿	[13.2]	4.7	3.2	染付		-	網目	見込釉刺	波佐見?	18c後	201216 000075
30	SK4	磁器	皿	[11.3]	[7.4]	2.9	染付		莫草	雪輪花	-	肥前	18c後、口サビ	201216 000074

Ⅲ. 調査の記録

第2表 出土遺物観察表その2

遺物 №	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎土 (製作地)	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
31	SK4	陶器	土瓶	7.2	-	(9.8)	褐釉・灰釉		カキ目	-	-		18c後	201216 000063
32	SK4	陶器	土瓶	6.7	[2.8]	8.5	透明釉・白土化粧		-	-	-		19c?	201216 000077
33	SK4	陶器	甕	[15.0]	-	(7.3)	鉄釉		貼花	-	-	高取	17c後	201216 000062
34	SK4	陶器	槽鉢	-	[7.6]	(7.0)	自然釉		-	槽目	-		17c	201216 000065
35	SK4	土師器	火消壺	-	[16.8]	(12.1)	にぶい黄橙色		ナデ	横ハケ・ナデ	オサエ・ナデ	精良		201216 000060
36	SK4	瓦	丸瓦	(25.3)	(12.1)	(5.2)	灰褐色	灰白色	ナデ	布目・模骨	-	精良	外面一部変色	201216 000078
37	SK31	土師器	坏身	12.5	8.4	3.6	橙色		ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、底部歪む	201216 000236
38	SK31	土師器	坏蓋	[12.1]	-	(1.65)	橙色		ナデ ケズリ	横ナデ	-	精良	7c後、ヘラ記号有	201216 000237
39	SP11	土製品	埴埴	[7.3]	-	(2.4)	にぶい黄橙色		オサエ	-	-	1mm以下の砂粒	緑青吹く	201216 000104
40	ST9	土師器	坏身	12.1	7.0	3.6	橙色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り ナデ	精良	9c2四半、副葬品	201216 000102
41	SX32	土師器	埋壺	-	25.7	(6.3)	にぶい 黄褐色	明黄褐色	ハケ ナデ	横ナデ	ハケ目・ナデ	精良	17c後以降、便所壺	201216 000248
42	上層 遺構面	土師器	模倣坏	[10.7]	1.8	4.4	橙色	にぶい 黄褐色	静止ヘラ ナデ	横ナデ	静止ヘラ・ナデ	精良	6c、磨耗著しい	201216 000781
43	上層 遺構面	須恵器	甕	-	1.85	(10.3)	褐灰色	灰白色	オサエ	横ナデ	静止ヘラ・ナデ	精良		201216 000799
44	上層 遺構面	土製品	埴埴	[5.4]	-	(2.35)	灰色	黄灰色	回転ヘラ ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	金属滓付着しない	201216 000785
45	整地層	土師器	坏身	12.4	7.6	3.6	橙色	浅黄褐色	回転ヘラ ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後	201216 000679
46	整地層	土師器	坏身	12.5	8.0	4.1	橙色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	9c前、焼け歪む	201216 000683
47	整地層	土師器	坏身	-	-	(3.0)	浅黄褐色		横ナデ	横ナデ	横ナデ	精良	9c	201216 000580
48	整地層	須恵器	坏身	[13.0]	[9.7]	2.1	暗灰黄色	灰褐色	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、焼け歪む	201216 000740
49	整地層	須恵器	高坏	[15.0]	-	(6.2)	灰色		横ナデ 沈線	横ナデ	ヘラ切り	精良	7c	201216 000739
50	整地層	石製品	砥石	(11.3)	(9.1)	(6.8)	にぶい黄褐色		-	-	-	砂岩製	重さ:744g	201216 000601
51	SP90	土製品	投弾	4.4	2.4	2.4	にぶい赤褐色		オサエ ナデ	-	-	精良	重さ:19.1g	201216 000395
52	SK91	弥生土器	甕	[33.8]	-	(8.3)	橙色		ハケ目	ナデ	-	1mm以下の砂粒		201216 000397
53	SK91	弥生土器	甕	-	[10.9]	(8.3)	浅黄褐色	にぶい 黄褐色	ハケ目	ナデ?	ナデ?	1mm以下の砂粒	磨耗著しい	201216 000403
54	SK91	弥生土器	蓋	-	5.95	(4.6)	浅黄褐色	にぶい 黄褐色	ハケ目	ハケ目	ナデ	1mm以下の砂粒	黒斑有	201216 000407
55	SK91	土師器	鉢	[20.4]	2.5	10.15	にぶい橙色	灰褐色	ハケ目 ナデ	ケズリ・ナデ	ケズリ	精良	8c後、被熱	201216 000411
56	SK93	土師器	坏身	13.5	9.0	(3.45)	浅黄褐色	橙色	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後	201216 000438
57	SK93	須恵器	坏身	[11.8]	-	(3.1)	灰オリーブ色	灰色	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	6c	201216 000450
58	SK93	刺書土器	坏身	-	-	(0.8)	にぶい橙色	橙色	-	横ナデ?	刻書	精良	「木」または「禾」「米」カ	201216 000442
59	SK94	土師器	坏身	12.8	9.5	(3.1)	橙色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、黒斑有	201216 000468
60	SK94	土師器	高台付坏	19.2	8.8	(5.6)	橙色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、磨耗著しい	201216 000469
61	SK94	土師器	高台付坏	-	11.5	(2.2)	橙色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、磨耗著しい	201216 000470
62	SK94	須恵器	坏蓋	[14.3]	[5.2]	1.9	褐灰色		横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	精良	8c2四半、転用硯	201216 000481
63	SK94	須恵器	坏蓋	18.4	5.6	2.9	灰白色	灰白色・橙色	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	1mm程の砂粒	8c後、軟質	201216 000482
64	SK94	須恵器	坏身	11.75	6.5	4.0	黄灰色	褐灰色	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c2四半	201216 000478
65	SK94	須恵器	坏身	[18.0]	13.2	1.95	灰白色		横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	精良	8c後、焼け歪む	201216 000479
66	攪乱	土師器	灯明皿	[10.4]	[6.6]	(1.8)	浅橙色・灰白色		横ナデ	横ナデ	ナデ・見込黒斑	精良	近世、口縁油煙	201216 000010
67	SI78	石器	ナイフ形石器	(5.4)	1.9	0.4 ~0.7	暗灰色					サヌカイト製	重さ:71g	201216 000385
68	SI78	石器	石包丁	(5.0)	(3.6)	0.75	褐灰色					粘板岩製	重さ:12.9g	201216 000384
69	SE3 桧内	銭貨	寛永通寶 (古寛永)	2.5	-	0.1	-						重さ:2.3g	201216 000029
70	SE3 桧内	銭貨	寛永通寶	2.45	-	0.1	-						重さ:(1.9)g	201216 000029
71	SK50	銭貨	洪武通寶	2.2	-	0.1	-						重さ:2.2g	201216 000308
72	SK50	銭貨	寛永通寶 (新寛永)	2.5	-	0.1	-						重さ:3.1g	201216 000306
73	SK50	銭貨	寛永通寶 (古寛永)	2.5	-	0.1	-						重さ:(0.7)g	201216 000307
74	攪乱	ガラス製品	医療用薬瓶	1.4	7.0	17.2	無色透明					気泡目立つ	300mlの目盛り線陽刻	201216 000015
75	表採	ガラス製品	化粧瓶	0.9	3.3 ~3.6	12.1	無色透明				「POLA」銘陽刻			201216 000828
76	表採	ガラス製品	薬瓶	1.6	2.7	6.7	無色透明						紙製パッキン入	201216 000829
77	表採	ガラス製品	目薬瓶	1.0	2.7 /1.7	5.8	無色透明						「大目薬」「夢天堂薬房」	201216 000827
78	攪乱	ガラス製品	目薬瓶	1.1	2.8 /1.8	5.8	無色透明				◇に田の陽刻	若干の気泡有	「特製ハッキリ」 「大阪 浪花薬師」	201216 000028
79	攪乱	ガラス製品	目薬瓶?	0.3	2.4 /1.0	(5.6)	無色透明						ラベル痕	201216 000016
80	整地層	瓦	丸瓦?	-	-	(0.9)	灰白色		-	布目	-	1mm以下の砂粒		201216 000657

IV. 総括

旧石器と弥生中期の集落

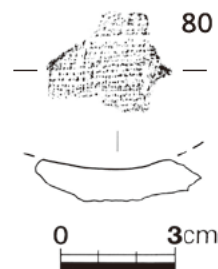
長らく旧石器の分布の空白地であった久留米城付近で、初の旧石器となるナイフ形石器が出土した。筑後川左岸の台地上が、この石器を遺した狩人たちの狩場だったのだろう。

本調査区で出土した弥生土器は、すべて須玖式土器の範疇に収まり、ほぼ全てが甕や器台などの日常土器である。本調査区付近では、久留米城外郭遺跡第8次調査や京隈侍屋敷遺跡第4次調査でも弥生時代中期の日常土器や石器が出土しており、特に後者では住居らしき方形土坑も検出されている。一方で、本調査区では、同時期の甕棺や筒形器台の破片もわずかだが出土した。久留米城外郭遺跡周辺の京隈侍屋敷遺跡や櫛原侍屋敷遺跡をはじめ、周辺の低台地上にある弥生中期の遺跡は甕棺墓が大半で、日常土器の出土は少ない。本調査区の位置する低台地上では、北側に集落が、南側に墓地があったと思われる。

古代の竪穴建物と整地層

S I 78・80 は、本遺跡で初めて見つかった古代の竪穴建物であり、台地西側に8世紀前半の集落があることが明確になった。節原郷の集落が、久留米城外郭遺跡にも広がっていた可能性がある。

上層の土壌墓 S T 9 に副葬された土師器坏身や、整地層内の出土遺物から、本調査区周辺では8世紀末から9世紀初頭に整地が行われたと考えられる。この造成は何に起因するのだろうか。故古賀壽氏が篠山神社で古代瓦を表採したことがあり(注)、本調査区でも、整地層内から布目を有する瓦の細片(第10図)が出土した。瓦を有し、整地を伴う施設があったと推測される。



第10図 整地層出土瓦実測図(1/2)

近世初頭の鑄造遺構

溝状遺構 S D 30・39・47 などからは、焼成粘土塊や鉄滓、砥石、さらに小型の埴塼など、金属加工に関する遺物が多数出土した。類似する埴塼は、多数の銅製品が出土した室町遺跡第2地点(福岡県北九州市、16世紀後半～17世紀前半)でも出土している。溝状遺構の類例は、大坂城 NW 10-4 次調査区(大阪府大阪市、17世紀前半)で見られる。ここでは、方形状の周溝を巡らせた中に、炉を有する金属製品の工房が検出されており、周溝は金属鍛冶の際の除湿施設だと指摘されている。

本調査区の溝状遺構の年代は、共伴する出土遺物の年代から、いずれも17世紀前半である。本調査区の溝状遺構も、金属加工、特に銅製品の鑄造に用いられた遺構であった可能性がある。想像を逞しくすれば、元和6年(1620)に始まる有馬豊氏の城普請の前後に、長くても半世紀だけだが、金属製品の加工がこの地で行われていたのかもしれない。

近世後期の屋敷地

1面では、17世紀前半の遺構のほかに、S E 3 や S K 4 などの近世後期の遺構がみられる。これらの年代は、18世紀が主であり、武家屋敷の遺構であったことを示す。井戸や廃棄土坑がまばらに分布することから、本調査区は屋敷の中でも、裏手の建物が少ない場所であったと思われる。

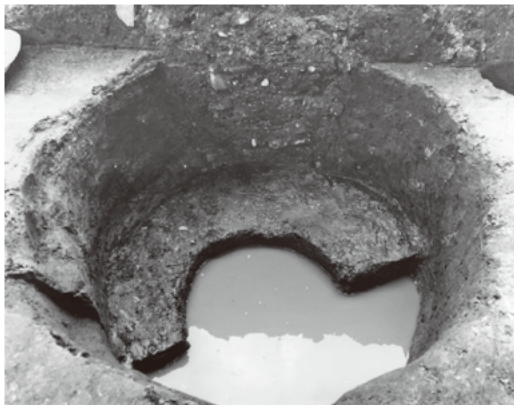
(注) 当課の小澤太郎氏の助言による。



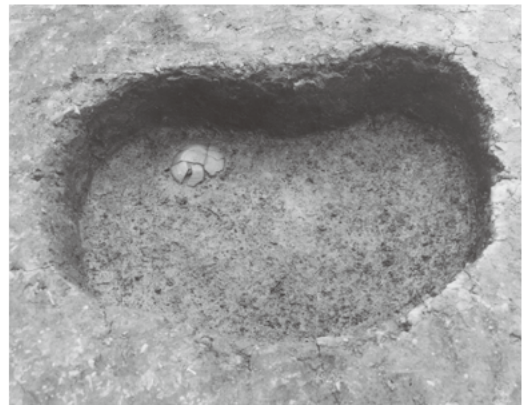
第11図 SD 30 北西部完掘状況（北から）



第12図 SD 39・47、SK 4 完掘状況（西から）



第13図 SE 3 完掘状況（西から）



第14図 ST 9 完掘状況（東から）



第15図 SX 32 検出状況（北から）



第16図 調査区上層全景（南から）



第17図 SI 78 完掘状況（北から）



第18図 SI 80 完掘状況（北から）



第19図 調査区下層全景（南から）



第20図 SD 30 出土陶磁器・瓦質土器



第21図 SD 30 出土瓦質土器（搦鉢）



第23図 SD 39 出土陶器・土器



第24図 SD 47 出土陶器・瓦質土器



第25図 SE 3出土土師器・磁器



第26図 SE 3出土染付



第27図 SE 3出土陶器



第28図 SK 4出土染付



第29図 SK 4出土陶器（土瓶）



第30図 SK 4出土陶器（甕・播鉢）



第31図 SK 4出土土師器・瓦



第32図 ST 9副葬土師器



第33図 S X 32 出土埋甕



第34図 S K 94 出土土師器・須恵器



第35図 攪乱出土土師器 (灯明皿)



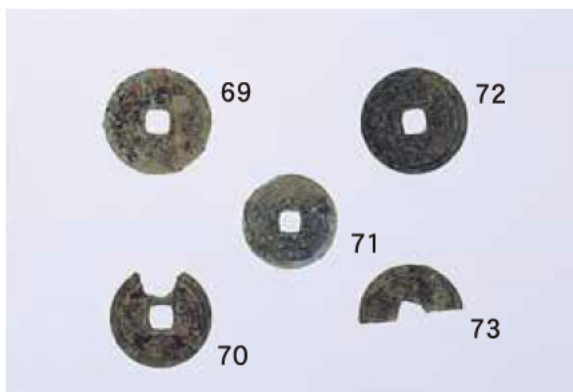
第36図 S K 93 出土刻書土器



第37図 調査区内出土埴埴



第38図 S I 80 出土石器



第39図 調査区内出土銭貨



第40図 攪乱出土・表採ガラス瓶

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうそとぐるわいせき							
書 名	久留米城外郭遺跡 ― 第 19 次発掘調査報告―							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 328 集							
編 著 者 名	西 拓巳							
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町 15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9715 E-mail:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2013（平成 25）年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ˊ 〃	東経 ° ˊ 〃	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
く る め じ ェ ー そ と ぐ る わ い せ き 久留米城 外郭遺跡 第 19 次調査	く る め じ じ ェ ー 久留米市 城南町	40203	—	33° 19ˊ 20〃	130° 30ˊ 25〃	2012. 7. 17 ～ 2012. 8. 20	75 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久留米城 外郭遺跡 第 19 次調査	集落	弥生 古代 近世	溝状遺構	3 条	弥生土器、土師器、須 恵器、瓦質土器、近世 陶磁器、土製品、金属 製品、石器、ガラス瓶		古代の堅穴建 物、整地層、近 世初頭の鑄造 遺構の可能性 がある溝を検 出。	
			堅穴建物	2 棟				
			土壌墓	1 基				
			井戸	1 基				
			土坑	10 基				
			整地層	1 箇所				
要 約								
本調査区は、筑後川左岸の洪積台地上に位置する。8 世紀後半から 9 世紀前半にかけての整地層を挟んで、2 つの文化層がある。上層からは、18 世紀の武家屋敷の遺構を始め、17 世紀前半の鑄造遺構の可能性のある溝状遺構や、古代の土壌墓などが検出された。 整地層の下層からは、8 世紀後半の堅穴建物 2 棟が検出され、本遺跡周辺には集落と、整地をともなう施設があったことが予想される。また、本遺跡周辺で初めて旧石器が出土した。								
土木工事の届出日	平成 24 年 6 月 22 日			遺物の発見通知日			平成 24 年 8 月 22 日	

久留米城外郭遺跡

― 第 19 次発掘調査報告 ―

久留米市文化財調査報告書 第 328 集

平成 25 年 3 月 31 日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町 410-1